

01

包摂・ケア・共生の最前線

On the Frontline of Inclusion, Care, and Coexistence

宮原真美子 | Mamiko Miyahara

近年、福祉施設の計画においての領域ごとの垣根をなくし、互いに交流が生まれるような“ごちゃまぜ”という理念が注目されている。これは「社会包摂 (social inclusion)」の考え方に後押しされたものであり、戦後日本の建築整備における住宅・学校・病院・福祉施設といった縦割りの施設体系への批判を含んでいる。戦後の建物種別ごとの建築計画論は、社会基盤の量的拡充が最優先された戦後から高度経済成長期において、限られた資源のなかで効率的かつ迅速に最低基準を満たすための合理的な方法であり、日本の近代化を支える重要な理論的基盤であった。しかし、人口減少や社会の多様化が進行する今日、従来の施設体系ごとの整備方式は、むしろ人々の生活領域を空間的に分断し、「社会包摂」を阻む要因ともなっている。実際、高齢者施設の多くは、地域コミュニティとの関係が希薄で、建物内の高齢化率が高く閉鎖的環境を生み出している。こうした状況への反省から、“ごちゃまぜ”という理念は、既存の施設計画を根本から問い直す視点として注目されている。しかし、異なる属性や世代を同じ場所に集めるだけでは、共生的な関係は自ずと生まれない。そこには「みんなで仲良くしよう」といったコミュニティ的な響きがあり、ある種の同調圧力として違和感を覚える人もいるだろう。共生的な関係を思考する上でむしろ重要なのは、「もの」「場」「運営の合理性」を媒介として、お互いに助け合いながらも、心地よい距離感を保ちながら関わる関係を構築することである。

この点を考える上で、ロラン・バルトがギリシャのアトス山の修道院に見た「共生」のあり方を参照したい。そこでは修道士たちが同じ修道院という空間を共有しながらも、典礼や食事などの時間を含め、それぞれが異なる生活リズムで暮らしている。バルトはこの生活形態を「イディオリトミー (固有のリズム)」と呼び、他者と共にありながらも互いのリズムを尊重し合う関係に「共生」の可能性を見いだした[1]。福祉施設におけるケアもまた、このイディオリトミー的な関係として再考できるだろう。またケアは、「共にケアすること (caring with)」「関心を向けること (caring about)」「配慮すること (caring for)」という多層的な行為として整理される[2]。「共にケア

をすること」に限らず、同じ空間を共有する他者に「配慮を向ける」こととして、より柔軟に捉えることができれば、“ごちゃまぜ”という福祉的な理念を超え、計画的合理性へと昇華させることができるのではないだろうか。

近年、神奈川県厚木市にある福祉施設で、地域福祉の拠点として設計された「春日台センター・センター (2023

年日本建築学会賞(作品))」や、大阪府大東市にある旧団地跡地を活用したまちづくりプロジェクトであり、市営住宅・商業・公共空間が一体的に整備されている「morineki プロジェクト」に代表されるように、用途や属性の境界を横断しながら共生的空間を再構築する実践が各地で芽生えつつある。これらの事例は、“ごちゃまぜ”を施設複合による単なる混在としてではなく、異なるリズムをもつ人々が互いに配慮しながら共に生きる場のデザインとして捉える視点を提示している。とはいえ、現代の建築計画において、高齢者と若者、子育て世帯と単身者、外国人と日本人、さらに所得階層の異なる人々が、空間的に交わりながら共に暮らす仕組みを計画的に構想することは、依然として容易ではない。本連載では、この課題を「共生」というテーマのもとに、次号以降、先に挙げた「春日台センター・センター」「morineki プロジェクト」をはじめ、先進的な実践が行われている福祉系施設を訪ね歩き、設計の構想段階・建設段階・運営段階という三つの視点からその現場を記述し、領域や制度の境界線を越えて生まれる空間のあり方を探りたい。どのように越境は生まれ、どのように「共にいる」ことが形づくられているのか。次回から、「越境の現場」を実際に巡る旅が始まる。



[Fig. 1]「春日台センター・センター」
団体が昼食をする傍ら、同じ空間で
淡々とゲームをしている少年

- [1] 星野太 (2023)『食客論』講談社
[2] 広井良典 (2000)『ケア学—越境
するケアへ』医学書院

宮原真美子 Mamiko Miyahara
佐賀大学／会誌編集委員会幹事